
世界は2つ廻ってる

真島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は2つ廻ってる

【Nコード】

N6466J

【作者名】

真島

【あらすじ】

友人が姿を消した場所に來た俺は、次元の狭間に吸い込まれ、別世界へととぶ。

別世界で待つのは、王国の処刑人と最強の名をほしいままとする友人の姿。 生きるために戦う。 そんなお話し。

プロローグ（前書き）

ファンタジーが流行ってるようなので、その流行にのっかることにした。

プロローグ

今日から、7ヶ月前に俺の友人が姿を消した。
文字通り、姿を消したのだ。

友人が消えた日のことを、まるで昨日かのように俺は覚えていた。

あの日、俺達は別の友人の家でポーカーに興じていた。

いつもなら、TVゲームをしている俺達が、今日はめずらしくトランプを始めた。

大富豪から始まり、ババ抜き、7並べと続き、ポーカーへと落ち着いた。

消えた彼は随分ついていて、高位の役を揃えては、俺達のチップをかつさらっていった。

俺達のチップというチップを奪いとって、彼は家に帰ると告げた。

3

それは、まさに勝ち逃げというもので、釈然としないものを感じた俺は

「明日も勝負な」と言いつつ、横腹を小突いた。

「勝てるかな？」と勝者の余裕っぷりがそれまた疎ましく、頭を小突いた。

別の友人の家から出ると、彼は俺にポーカーの確率論について花を咲かせ始めた。

もう俺としては、負けた上にこれとは、何の罰ゲームかと恨めしい目で彼を睨めつけた。

彼としても、自分の話に夢中で俺の私怨に気づかないまま、 15

分間丸々話し、別れの丁字路まで来た。

「あれ？もうお別れ？残念だなあ・・・いい話なのに」

「ああ、いい話だった。つまり、空気読めない奴ほど強いってことだろ？」

「もしかして、それ、俺に対しての皮肉？」

ああ、もちろんだとも、ヤマト。皮肉の1つや2つ、許される行為をしたのはおまえだからな。

明日は必ず倒す、そして埋める、そんなこと言って別れを告げた。

「埋めるって・・・ええ？ ええ？」

いちいち反応が癪に障る野郎だよ、ヤマト。

慌てふためくヤマトを尻目に俺は帰路へとついた。

「おまえが言うつと、冗談に聞こえねえんだよ！」

最後に聞いたヤマトの声である。

なんでもヤマトは、俺と別れた丁字路の奥で行方をくらましたらしい。

俺が彼と最後に会った人として、色々な事を根ほり葉ほり聞かれたが、今の話しを聞いていて何か彼に不審な点でもあったらどうか？ いや、ない。これは事件だ。

一時期、集団下校をしたりして、街はこの事件の余波を恐れた。幸いなことに何も起きなかったが、月日がたつにつれ街はこの事件を忘れはじめた。

俺は今、彼が消えたとされる場所にいる。

そこには、花束とかジュースが備えてあった。くそつたれと悪態をつく。

まだ彼が死んだと決まったわけじゃないだろ！

「おい、どこ行ったんだよ・・・笑えねえぞ・・・ポーカーするんじゃないかったのかよ・・・」
どこかにいる彼にささやく。次第にふつつつと怒りがわき上がってきた。

「ふざけんなよ！」

叫ぶ。

「帰ってこいや！」

叫ぶ。

「埋めんぞ・・・」

叫ぶ・・・？

違和感を感じた。叫んだ声が、一つの点に吸い込まれているのだ。なんだ？なんなんだ？ 人生で初めて経験する畏怖の感情。何が起きている？

刹那、声だけでなく、俺の輪郭も吸い取られはじめたのだ。

骨、肉、臓器が一つの点にむかってごちゃまぜになっていく。

次第に俺の存在が薄れていく。ともに意識もとぎれ始めた。

「ヤマト・・・」

その囁きとともに俺の意識はとぎれ、俺の存在がこの世から消えた。

丁字路には花束とジュース、供え物を狙うカラスの鳴き声がやたら響き渡った。

プロローグ（後書き）

次元の狭間に吸い込まれる点をもつ少し詳しく書きたがったが、無理だった。

いつか書けるようになるかなあ・・・

第一話 前触れ(前書き)

ああ、ファンタジーって難しい・・・

第一話 前触れ

天高くそびえたつ樹木達。見上げども、青い空はいつこうに姿を見せず、葉に覆われた地上はうつすらと暗い。ときおり差す光は空を見上げる者の目を細めさせ、ある一点を照らしては、やがてしぼんで消えていった。耳を澄ますと、ホーンと動物たちの鳴き声がこだまし聞こえてきた。

大地の母・そう呼ばれるこの森に長身で金髪な端正な顔をした男と女がたたずみ、さえず話し合っていた。男はティトー、女はマーニ、そう呼ばれている。ティトーがマーニに話しかけた。

「今の鳴き声はなんだ？生まれてこの方、初めて聞いた気がする。」

「私もいまいち確信をもちえませんが、たぶんホロロギンネでは？」

「ホロロギンネ？ 鳴かない動物ではなかったのかい？」

その言葉を否定するかのように、ホーンとまたこだまして聞こえてきた。先ほどの鳴き声もふまえ、どこにいるのかはつきりと把握はできないでいたが、そう遠くはないところにいるらしかった。

「珍しいですね。私も鳴き声を聞くのは、これで二回目です。」

「二回目・・・そういや、ホロロギンネって神話にでてきたよな？」

マーニはティトーの口から「神話」という単語がでたことにいささか驚いているようだった。いつもより開いたグリーン色の目がやたら印象的である。本来ならこの反応に憤慨するティトーだが、マ

「一の二回目という単語がひっかかったのか、無反応である。マーニが一呼吸の間をおいて答えた。」

「ええ、確かに出ていました。神様がこの世に現れた際に鳴いた動物だったはず。てんじて、ホロロギンネは変化の象徴とされました。」

「変化の象徴？それはまた難儀だね・・・」

変化は嫌いだ、とティトーがボソツと呟いた。今度はマーニが自分で言った二回目という単語にひっかかっているようだった。顎に手をやり、考え事にふける。

「一回目・・・一回目・・・一回目っていつ聞いたかな・・・？」

「口調が素に戻っているぞ、マーニ」

「うっさいなあ・・・兄さんだけなんだし」

はあと溜め息をつくティトーを尻目にマーニは思索にふける。はっと思いついたのか、人差し指を天に指し、嬉しそうに言う。

「あっ！思い出した！コウゴが来た日だ！」

刹那、マーニもティトーも互いの顔を見合わせた。一瞬にして空気がはりつめ、先ほどのどや顔からうっつかわって緊迫した面持ちとなる。ティトーがマーニに緊迫した口調で言った。

「マーニ、すぐにコウゴを呼んでくるんだ。サンディエゴで待っている。」

その言葉に頷いてみせると、マーニは走っていった。

「だから、変化は嫌いなんだ」

「またも呟くと、テイターはその場から、消えた。」

第一話 前触れ（後書き）

動物の名前はどうか考えても手抜きです。

第二話 この世界の弱さ

マーニは大地の母で最も巨大な湖へと向かっていた。大地の母の最大の湖とあって、様々な生き物が姿を見せ、その様は楽園といっても過言ではないかもしれない。とはいえ、牙をもった生き物も姿を現した途端、地獄に最も近い楽園へと早変わりする。そんな気ままな楽園を人間が目にしたのは数えられるほどしかない。そんな楽園にマーニは入り込むことができたのはコウゴのおかげであった。

そんなコウゴからすれば、この楽園はこの世界の弱さとも言い換えることができる。

「マーニ、ここまで来るなんて珍しいね」

「ええ、それなりの要件がありました。コウゴは相変わらずの人外さですね」

ええ、ひどい言われようだなあ、と肩を落とすコウゴ。マーニの目につくのは、そんなコウゴの姿ではなく、黒い槍に串刺しにされた生き物達の亡骸だった。黒い槍を纏う様々な色の血。地面まで滴るとほかの血と混じり、ひどく濁った一筋の道をつくっている。

「趣味が悪いです。人外といわれるのも仕方ありませんよ」

「あっちから襲いかかってきたのを殺したただだよ？ まあ、確かにこれは悪趣味だけど」

振り返り、後ろの惨状をみて苦笑いしながら、コウゴは言った。

「また凄いものを倒しましたね。グレイトアーリなんて騎士団でも

倒せるか微妙なとこなんですが」

「いや、そんな強くはなかったよ。確かに魔力障壁は中々に見どころがあつたけど、物理的に殴ればいいだけ」

「物理的に殴れないから、困っているですよ。そんな簡単に言わないでください」

「何にしる、そこからが人達の本領だろ？ なに諦めてんのか、俺には理解不能ってやつだ」

「騎士団泣かせは伊達ではありませんね」

「伊達も何も、本当のことを言っているだけ。そう、この世界が弱いだけ。それ以上でもそれ以下でもない」

パンと手を叩くと、亡骸から槍が消えて次々と地面へと落下していった。もう一度、パンと手を叩くと亡骸が青白く光り始め、徐々にその存在が薄くなつていった。それらが完全に消えてしまうと、深く長い息をコウゴは吐いた。マーニは一連の行動をどこか呆れた目で見守っていた。

「魔力量、スピード、正確さ、どれをとっても一流。本当に魔法の存在がない世界から来たのですか？魔法を知ってから半年のレベルではないですよ」

「何度も言わせないで欲しい。ただ単純にイメージ不足だよ、マーニ達のね」

「イメージ不足と言われましても……何をイメージしろというのですか？」

「属性とかそんな小さなことなんか考えず、漠然と世界を構築する感じ？」

「……貴方の説明ではわかることもわからなくなりそうで嫌いです」

ため息をつくマーニを尻目にコウゴは人差し指をたてた。ポンと生み出される黒い球体。

「これは何でしょう?」

コウゴの出した質問の意図を考えつつ、マーニはわかりませんと答えた。

「正解はただの黒い球体でした」

「もしかして、私を馬鹿にしています?」

「いやいや、違うって。俺が言いたいことはこれなんだって。まあこの話をしちゃうと時間かかるから、やめとくか」

ふっと黒い球体に息を吐きかけると消えてしまった。マーニはそんなコウゴの言葉で何故ここに来たのかを今更ながら思い出した。

「コウゴ。今更ですが、緊急事態です」

「まあ、そんなことだろうとは思ったよ。いつものとこ?」

マーニが答える前に、近づいてくるコウゴ。不審な目で見やりながら、はい、と答える。

「じゃあ、頼んだわ」

彼の発言の意味を理解する前に変身がとけ、マーニの本来の姿が現れた。

深紅の飛龍。牙はなく、滑らか肢体。人間に翼を付けたともいえるその姿はとも大きくというわけではないが、コウゴよりは大きく。そして、コウゴをのせるのには丁度良い大きさ。

「ちょっと、なんでわざわざ私の上に乗る必要があるのよ!」

「いや、なんか乗りたくなって。こんなときでしか乗る機会ないからさあ」

楽しそうに笑いつつ、にじり寄ってくるコウゴから離れようとするも目視できない何か体に縛り付けられていて身動きがとれなかった。そんなマーニの精一杯の抵抗であった。

「変態！魔法使うなんて卑怯！それこそ、魔法使って帰ったほうが早いでしょ！」

「しまった、魔力が今のできたああ。迂闊でした、すみません」

「見え透いた嘘つくな！いやよ、貴方をのせるなんて！」

「嫌も嫌もいいのうちって便利な言葉があっただな。まあそのなんだ、諦める」

「諦めないから！」

時間にして15分後。大地の母の上空を飛ぶマーニに、その背に乗る嬉しそうなコウゴの姿を生き物たちは見た。

第二話 この世界の弱さ（後書き）

何か変な点を見つけた場合、報告してくださいと大変ありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6466j/>

世界は2つ廻ってる

2011年10月5日23時51分発行